

# JSPS Stockholm News Letter

2015 Winter



Vol. 45

## Prologue 01

ノルウェーの森

## News 02

2014年ノーベルウィーク/ Arctic Nexus in Asian-Nordic+ Relations への参加/ スウェーデン同窓会 Joint Board Meeting & General Assembly の開催/ スtockホルム大学 Student Fair への参加/ 日・デンマーク研究交流意見交換会への出席/ フィンランド同窓会 General Assembly & Board Meeting、All Alumni Meeting の開催/ 在スウェーデン日本国大使館新年祝賀会への参加/ 2014年度第3回KVA-JSPSセミナーの開催/ 「ノーベル・プライズ・ダイアログ・東京2015」への参加/ Finnish-Japanese joint symposium on Morphogenesis and Signaling への出席

## Reports 07

第3回SWEDEN-JAPN ACADEMIC NETWORKIにおけるKeynote Lectureの報告/ 『7世紀におけるアッシリアのバビロニア政策』/ コラム～スウェーデンのお菓子「セムラ」～/ その他打合せ・来会等

## Academic Information 13

日本人研究者がクラフォード賞を受賞/ スウェーデンの新しい研究センター「Swetox」始動/ フィンランド政府：大学のプロファイリング(独自性強化)に対する競争的資金の提供を開始/ デンマーク：宇宙開発事業への投資を強化/ ノルウェーの研究者を中心とした研究チームが、EUによる研究資金を獲得/ アイスランド：科学と芸術分野を融合させた国際会議の開催/ KI Bladet

## Notice 16

イベント予定  
事業のご案内  
カロリンスカ研究所同窓会 会員募集  
JSPS Stockholm News Letter 定期購読



## ノルウェーの森

JSPSストックホルム研究連絡センター長 阿久津 秀雄

2014年のノーベル物理学賞は3名の日本人研究者に輝いた。赤崎、天野、中村教授に心からお祝いを申し上げたい。もう一つ目を引いたのはノルウェーの研究者夫婦が恩師とともに医学生理学賞を授与されたことである。ノルウェー科学技術大学（NTNU）で神経科学の教育と研究に従事しているMay-Britt MoserおよびEdward I. Moser教授である。1970年代にJohn O'Keefe教授（ロンドン大学）が動き回るラットの居場所に反応する細胞（place cells）を脳海馬内で発見した。動物が自分の存在位置をどのように認識しているかという基本的な問題への重要な啓示となったが、なぜ1点の反応で2次元、あるいは3次元の位置を認識できるのかという疑問が残る。一時期、O'Keefe教授の研究室に滞在して問題意識を磨いた二人はNTNUに戻ってこの研究に全力で取り組んだ。彼らは海馬の近くにある嗅内皮質という組織に、ラットが動くそれぞれの場合に対して二次元的な反応を示す格子細胞（grid cells）が存在し、これが場所細胞とネットワークを形成して自分の位置を認識することを見いだした。実際にはこれ以外の細胞も加わって脳内GPSが形成されているという。この業績はノルウェーの研究レベルの高さを示すと同時に、同国での女性の活躍を印象づけた。受賞講演におけるMay-Britt Moser教授の講演は話の分かりやすさ、あふれる才気で聴衆を魅了した。

ノルウェーバイキングは海図なき荒海に乗り出してアイスランドに植民し、次いでグリーンランドに植民した。さらにアイスランドに残るサガによれば紀元1000年頃にはグリーンランドからアメリカ大陸に渡り、いろいろな場所を探検したという。その後、アメリカへの植民を試みたとも言われている。ノルウェーの先人の犠牲を恐れぬ未知への挑戦の精神はわれわれを感動させる。このDNAは海図なき学問領域に挑戦したMoser教授夫妻の研究にも受け継がれている。偶然ではあろうが、自分たちの体当たりの冒険をとおして未知の領域の海図を作っていたバイキングと、やはり体当たりの行動を通して自分の周りの地図を作っていくラットの脳内GPSとは重なる部分があるようで興味深い。

ノルウェーの人々の恐れを知らぬ進取の気風はどこから来たのであろうか。この国は厳しい自然環境の北欧諸国の中でも地勢の厳しさが際立っている。南部にはスカンジナビア山脈



最高峰の山々を抱え、北部では海に迫った山嶺から険しい山肌が鋭い傾斜でノルウェー海へと落ち込んで行く。

スウェーデン北部のキルナからノルウェーのナルビクまで列車の旅をすると国境を境に風景は一変する。スウェーデン側では森と湖の穏やかな山岳風景が続くが、ノルウェー側に出ると山容は険しくなり、断崖がフィヨルドに屹立している。列車は転がるようにナルビクに向かって下って行く。おのずとそこでの生活の厳しさが想像された。ノルウェーは平地が少なく、畑作にはあまり向かない。険しい山地での酪農や林業も容易ではない。この厳しい自然が恐れを知らぬ精神を育てたのであろう。人々の血のにじむような努力によって人口510万程度の北端の小国はヨーロッパの先進工業国となることに成功した。かつては世界第3の商船隊を擁して七つの海を駆け巡り、今は北海油田によってヨーロッパの資源大国になっている。この油田で稼いだ豊かな資金を使って次の挑戦も準備している。特に石油の後の主要産業の育成は焦眉の急となっている。また、列国の関心が高まる中、持続可能な北極圏開発も避けて通れない課題である。政府はこれらを担う科学技術研究とイノベーションに力を入れており、科学技術協力でのわが国への期待も大きい。わが国にとっても魅力的な協力相手である。

日本ではノルウェーと言えばフィヨルドと氷河が残る地の果てのイメージが強いが、飲み屋で定番のノルウェー産サーモンや、ディズニーの「アナと雪の女王」の舞台として意外と親近感もある。むかし読んだ「ノルウェイの森」（村上春樹）という本を思い出す。タイトルに惹かれて買ったが、ページをめくるとこれはノルウェーとは無関係な本であることが直ちに分かった。しかし、不思議とタイトルの余韻は最後まで残った。この本でタイトルはビートルズの歌から来たと知ったが、その歌も実はノルウェーの森とはあまり関係のないものである。にもかかわらず、ノルウェーの森は日本人の心に響いた。ノルウェーの森にはトロールなどの不思議な妖精がいて、われわれが予想もできないことが起っていきそうな夢をかき立てる。脳内GPSについてのMoser教授夫妻の研究もそこからのすばらしい贈り物の一つかもしれないし、そこには雪の女王の隠れ家があるかもしれない。ノルウェーの森は意外性の魅力にあふれている。



## 2014年ノーベルウィーク

スウェーデンの科学者アルフレッド・ノーベルの命日である12月10日に、毎年ノーベル賞の授賞式が行われる。この日を含む1週間は「ノーベルウィーク」と呼ばれ、ノーベル財団主催の講演会や晩餐会など様々な行事が行われ、世界が注目する1週間となる。

2014年は赤崎勇氏（名城大学終身教授及び名古屋大学名誉教授）、天野浩氏（名古屋大学教授）、中村修二氏（カリフォルニア大学サンタバーバラ校教授）の3氏がノーベル物理学賞を受賞され、日本でもこれらの行事が連日報道されていた。

2014年のスケジュールと行事内容を以下のとおり紹介する。

### 【12月7日（日）】

13時よりカロリンスカ研究所において生理学・医学賞、17時半よりSwedish Academyにおいて文学賞のノーベルレクチャーがそれぞれ行われた。生理学・医学賞のノーベルレクチャーが開催されたAula Medicaには、1,000名の収容が可能な講堂に立ち見が出るほどの多くの聴講者が訪れ、受賞者のJohn O'Keefe氏、May-Britt Moser氏、及びEdvard I. Moser氏の3氏の講演に聞き入る姿が見受けられた。

### 【12月8日（月）】

9時よりストックホルム大学にて物理学賞、化学賞、経済学賞のノーベルレクチャーが行われた。物理学賞のノーベルレクチャーには赤崎勇氏、天野浩氏、中村修二氏の3氏が出席し、自身の経歴や研究にまつわるエピソード、共同研究者や家族への感謝のメッセージを込めた講演を行い、会場を大いに沸かせた。

また、物理学賞ノーベルレクチャー直後の12時より、ストックホルム市内において在スウェーデン日本国大使館特命全権大使主催による祝賀会が開催され、スウェーデンで研究活動を行っている日本人研究者や、日本と関係の深いスウェーデンの学術機関関係者等が受賞者を祝福した。祝賀会終了後には、同主催による邦人報道関係者向け記者会見が開催され、赤崎氏、天野氏、中村氏が揃って記者の質問に回答していた。

19時からは、ストックホルム・コンサートホールにおいてノーベルコンサートが開催され、観客はラトビア出身指揮者Andris Nelsonsによる、ロイヤル・ストックホルムフィルハーモニー管弦楽団の演奏を堪能した。



赤崎勇氏、天野浩氏、中村修二氏による講演直後の様子



邦人報道関係者向け記者会見の様子

### 【12月9日（火）】

9時30分より、ノーベルウィークダイアログが開催された。本イベントは、2012年より毎年スウェーデンにおいてノーベル賞授賞式の時期に開催されている一般向けの公開シンポジウムである。3回目の開催となる今回は、「The Age to Come」というテーマのもと、ノーベル賞受賞者や世界で活躍するトップレベルの科学者の他、報道関係者や企業の役員、政治家等、幅広い分野から32名のパネリストが集結し、講演やパネルディスカッションを行った。1000人を超える参加者が会場を訪れた他、当日の様子はオンデマンドでライブ中継され、80か国以上の人々がアクセスした。同イベントの休憩時間を利用して、ノーベル財団と日本学術振興会との共同主催により開催される「ノーベル・プライズ・ダイアログ東京2015」について、同日に来瑞した安西祐一郎日本学術振興会理事長とLars Heikenstenノーベル財団専務理事との間で覚書への署名が行われた。



ノーベルウィークダイアログ  
パネルディスカッションの様子

### 【12月10日（水）】

ノーベルウィークの最終日であるこの日は、16時30分よりコンサートホールにおいて授賞式が、19時よりストックホルム市庁舎において晩餐会が開催され、各賞の受賞者と関係者が出席し、ロイヤルファミリーも来賓として出席した。授賞式及び晩餐会には、安西理事長御夫妻が出席し、受賞者たちを祝福した。安西理事長は、前述の「ノーベル・プライズ・ダイアログ東京2015」に関する覚書への署名の他、ノーベル博物館やカロリンスカ研究所、JSPSストックホルム研究連絡センターを訪問し、日瑞間の学術交流の推進のため、関係者との会談等を行った。



## Arctic Nexus in Asian-Nordic+ Relationsへの参加

2014年11月5日～7日の3日間にかけて、デンマーク・オオルボーにおいて、オオルボー大学主催による北極圏研究をテーマとしたワークショップが開催され、初日となる11月5日には当センターより阿久津センター長と工藤国際協力員が出席し、JSPS事業紹介を行った。会議には北極評議会構成8か国を含めて12か国の大学・機関に所属する研究者が参加した。

ワークショップ開催前の昼食会では、Rasmus Gjedssø Bertelsen オオルボー大学助教とLi Xingオオルボー大学教授による開会挨拶に続き、参加者による自己紹介が行われた。デンマークからはグリーンランド、フェロー諸島自治領の研究者も参加していた。本ワークショップは、北極圏管理、北極圏科学、北極圏地政学、北極圏原住民とアジアの4つのセッションで構成されており、各セッションでは約10名の研究者をパネラーとしたパネルディスカッションが行われた。各セッションでは参加研究者の研究内容に関する情報交換と意見交換が活発に行われていた。

## スウェーデン同窓会Joint Board Meeting & General Assemblyの開催

2014年11月13日に、スウェーデン王立科学アカデミー（KVA）において、Joint Board Meeting & General Assemblyが開催され、ボードメンバーとレギュラーメンバー計7名が出席した。2013年度にJonas Olsson博士（Swedish Meteorological & Hydrological Institute（企業）所属）の企画で開催されたスウェーデン同窓会セミナー“Meteorological Data and Large-Scale Hydrological Climate Studies”の開催報告や、2014年度にBRIDGE Fellowに採用されたImre Pázsit シャルマーシュ工科大学教授による、筑波大学での研究成果に関する報告が行われ、両報告後には質疑応答や意見交換が多くみられた。

また、2015年度以降のBRIDGE Fellowship Programや、スウェーデン同窓会10周年記念行事について議論が行われ、今後の同窓会活動について活発な議論が行われた。

また、2015年度以降のBRIDGE Fellowship Programや、スウェーデン同窓会10周年記念行事について議論が行われ、今後の同窓会活動について活発な議論が行われた。



Jonas Olsson博士による報告の様子

## ストックホルム大学 Student Fair への参加



当日のJSPSブースの様子

2014年11月25日、ストックホルム大学において、海外提携大学や各国大使館等がブースを設置し学生へ留学情報などを発信する「Student Fair」が開催され、ストックホルム研究連絡センターも在スウェーデン日本国大使館と共にブースを設置し、日本での研究に興味を持つ学生や若手研究者に対して、JSPSフェローシップ等の事業説明を行った。

今回のイベントはストックホルム大学にて留学情報を提供する目的で開催された「International Week」の一環として開催されており、当日は、約50の国や地域、団体がブースを設置し、留学希望者は派遣希望先の留学情報に熱心に耳を傾けていた。

## 日・デンマーク研究交流意見交換会への出席

2014年11月26日に、在デンマーク日本国大使館において、研究者の視点からみたデンマーク社会及び学術分野の最新の動向等を研究者から直接聞く機会を作ることを目的とした日・デンマーク研究交流意見交換会が開催された。本意見交換会には、デンマークとスウェーデンに在住の研究者約20名が参加し、当センターより阿久津センター長が出席した。

最初に末井誠史在デンマーク日本国大使館特命全権大使の挨拶があり、2014年3月に結ばれた日本・デンマーク戦略的パートナーシップの設立に関する共同声明に関する説明と、科学技術についても研究者の意見を聞きながら交流を進めていきたいという抱負が述べられた。

領事関係の案内や大使館員、阿久津センター長、参加者の自己紹介の後には、末井大使を囲んで社会科学から自然科学まで、多岐にわたる分野の意見交換が行われた。

## フィンランド同窓会General Assembly & Board Meeting、All Alumni Meetingの開催

2014年11月27日に、フィンランド（エスポー）において、JSPSフィンランド同窓会Board Meetingが開催され、4名のボードメンバーが今年の活動内容を振り返ると共に、来年の活動内容の方針を議論した。

その後、同会場においてGeneral Assembly（総会）が開催され、ボードメンバーを含む8名が出席した。本総会では、セミナーやボードミーティングを含む今年の活動報告や来年の活動予定について議論が行われた。特に来年の活動内容について先に開催されたBoard Meetingにおいて決定した方針がChairのKristiina Jokinenヘルシンキ大学非常勤教授より説明され、出席者全員の承認を得ることができた。また、ボードメンバーの紹介も行われ、本総会を機に新たなボードメンバーも決定した。



General Assembly（総会）参加者



Tapani Jussila博士による講演の様子

総会の後には同会場において、当センター、JSPSフィンランド同窓会、在フィンランド日本国大使館、北海道大学ヘルシンキオフィスの共催によるAll Alumni Meetingが開催され、JSPSフィンランド同窓会ボードメンバーの伊藤早苗氏、Tapani Jussila博士による、自身の研究内容や日本での留学経験に関する講演が行われた。当ミーティングには、各機関の同窓会関係者約30名が出席し、講演後は講演内容に関する質問が多く寄せられた。

終了後には、レセプションが開催され、参加者同士が日本への留学に関する情報交換をする姿が多く見られた。（p.8にヘルシンキ大学伊藤早苗氏による報告を掲載）

## 在スウェーデン日本国大使館新年祝賀会への参加

2015年1月20日に、在スウェーデン日本国大使館特命全権大使公邸において新年祝賀会が開催され、スウェーデン在住の日本人や日本企業の関係者、日本と深いつながりをもつスウェーデン人等、約130人が参加した。

祝賀会では、森元誠二在スウェーデン日本国大使館特命全権大使より、豊穰の象徴とされている羊が2015年の干支である事にちなんで今年も飛躍の一年になるようにとの願いをこめた挨拶と、昨年11月のAida Hadzialic教育研究省高校・成人教育大臣の来日等に触れながら、日本人会の活動やスウェーデンの日本への関心の高さに関してお話しがあった。

また、鏡割りや餅つき等の催しとともに和食や日本酒がふるまわれ、和やかな雰囲気の中、参加者同士の懇親が深められた。



参加者による懇親の様子



## 2014年度第3回KVA-JSPSセミナーの開催

当センターは2009年度からスウェーデン王立科学アカデミー(KVA)との共催で、当地で関心が高い研究業績を有する日本の研究者の講演会を企画・開催している。

2014年度3回目となる今回は、竹内昌治東京大学生産技術研究所教授を招聘し、2015年2月16日に、カロリンスカ研究所 SciLifeLab (Science for Life Laboratory)において同セミナーを開催した。

午前には、竹内教授による"Microfluidics for Biomedical Applications"をテーマとした講演と、Sunghoon Kwon ソウル大学教授による"Translation from Lab to Clinic: Rapid Antibiotic Susceptibility Test & Laser Sniper Cloning"をテーマとした講演が行われ、約40名の学生や研究者が出席した。午後には、学生とのワークショップも開催され、講演者とスウェーデンの学生との活発な意見交換が行われていた。

(報告は次号(46号)に掲載予定)



竹内教授による講演の様子



KVAセミナー講演者及びコーディネーターとの写真

## 「ノーベル・プライズ・ダイアログ・東京2015」への参加

2015年3月1日に、東京国際フォーラムにおいてノーベル・メディア及び日本学術振興会の共同主催で「ノーベル・プライズ・ダイアログ・東京2015」が開催され、川窪副センター長がスタッフの一員として参加した。

「ノーベル・プライズ・ダイアログ」は、2012年からスウェーデン国内でノーベル受賞式の時期に開催されている「ノーベル・ウィーク・ダイアログ」を、スウェーデン国外で開催するものであり、その初めての取組として東京での開催が実現した。

今回は、「生命科学が拓く未来」をテーマに、遺伝学、ゲノム科学をはじめとする生命科学の発展が、現在、未来の私たちの社会に何をもたらすのかを問い、iPS細胞研究の医療への応用やオーダーメイド医療、遺伝子組換え生物、人類の進化、アジアにおける生命科学と他分野の融合研究などの新たな展開に焦点を当て、講演やパネル・ディスカッションが行われた。

当日は、国内外から800名程度が参加し、参加者からの様々な質問にノーベル賞受賞者や著名な科学者が応じる形で対話が行われ、盛況のうちに終了した。会場の様子はインターネットでライブ中継され、会場外からも本イベントの様子を視聴することができた。



安西祐一郎JSPS理事長による主催者挨拶の様子

## Finnish-Japanese joint symposium on Morphogenesis and Signalingへの出席

2015年3月3日～4日にかけて、ヘルシンキ大学バイオセンターにおいて、ヘルシンキ大学Integrative Life Science doctoral program (ILS)、同大学The Center of Excellence in Experimental and Computational Developmental Biology (ECDev)、The Finnish Society for Developmental Biologyの共催により、Morphogenesis and Signalingをテーマとしたシンポジウムが開催され、関連分野の研究者や大学院学生等約100名が出席した。本シンポジウムには、東京大学、大阪大学、基礎生物学研究所から10名の研究者が講演を行った他、上記大学とヘルシンキ大学に所属する博士課程学生と若手研究者20名以上が、ポスター発表を行った。



シンポジウム参加者の集合写真（3月3日）

初日である3月3日には、当センターから工藤国際協力員が出席し、午前の講演の終了後にJSPS外国人特別研究員制度をはじめとする事業の紹介を行った。また、直後に開催されたポスターセッションにJSPSストックホルム研究連絡センターとして参加し、フィンランドのポスドク研究者に対して、外国人特別研究員制度に関する詳細な説明を行った。

## 第3回SWEDEN-JAPN ACADEMIC NETWORKにおけるKeynote Lectureの報告

ウプサラ大学教養学部ゲームデザイン学科教授 中嶋 正之

今年で3回目となる“SWEDEN-JAPN ACADEMIC NETWORK”が11月13日にストックホルム大学構内にあるThe Royal Swedish Academy of Sciencesの Beijer Hallで開催された。このイベントは、The Royal Swedish Academy of Sciences, 日本大使館、JSPSストックホルム研究連絡センターの協同主催で開催され、文字通り日本とスウェーデンの主として学問エリアでの交流を目的としている。

毎回、1名または2名のスウェーデン在住の日本の研究者や日本との関係が深いスウェーデンの研究者から選ばれるそうである。今年は、中嶋がKeynote Lecture として招待され、以下のタイトルでの講演を行った。

**My Game Research in Sweden for a bridge between Japan and Sweden**

なぜ中嶋がこの大役が回ってきたかというのは定かではないが、現在、スウェーデンを代表するウプサラ大学に所属していること、ならびに所属する学科がゲームデザインという、アカデミックではないが、現在、日本が世界をリードし、そしてスウェーデンにおいても今後、大きな輸出産業への発展が見込めるゲーム分野に関する教育ならびに研究に関する講演を期待しているからと推測される。

さて講演であるが、どのような内容にするか最初は悩んだが、参加される方々が必ずしも大学や研究所に勤務する研究者だけではなく、広くストックホルムに在住の日本人のネットワークへも広報が通知され、一般の方も参加するとのことで、幅広く、現在中嶋が所属しているウプサラ大学ゲーム学科の成り立ち、中嶋の本学科での研究の概要、そして本学科におけるゲーム教育の現状、そして最後にスウェーデンにおけるゲーム産業の現状の紹介をすることにした。



中嶋の講演の様子



懇親パーティにて

JSPSストックホルム研究連絡センターの阿久津センター長とともに

まず始めに自己紹介代わりに、東工大定年の後、ゴットランド大学の教授へ所属し、そして現在のウプサラ大学教授となったのかを紹介した。実は、東工大の定年後にゴットランド大学へ着任したのは、2004年の春から、中嶋研とゴットランド大学との交流が開始され、毎年数回、ゴットランドを訪問し、最新のCGやマルチメディア関連の講演行ったり、ゲーム教育のあり方などの議論を重ねており、そしてゴットランド大学からも東工大へスタッフが長期滞在したりとの相互交流の実績のもとに、実現したのである。そして、ゴットランド大学が2013年7月にウプサラ大学と合併し、そのままウプサラ大学教授となった次第である。

自己紹介の後、本学ゲームデザイン学科の特徴（ゲーム教育方針、カリキュラム、最大のイベントであるGGC: Gotland Game Conference、ゲーム関連施設など）を紹介し、そして中嶋が所属する主にエンジニアリングサイドからゲーム教育を支援するCMLab(Convergent Media Laboratory )における現在の研究の内容を詳しく紹介させていただいた。

最後に現在急激に進展を遂げているスウェーデンにおけるゲーム産業の現状についての報告（現在、世界的にヒットしているゲームの多くがスウェーデン製であることをタイトルとともに紹介、ゲームの輸出金額とその伸び、スウェーデンにおけるGDPの伸びにおけるゲーム産業の貢献、など）を行った。また、中嶋のウプサラ大学ゲームデザイン学科におけるゲーム関連の重要な仕事が毎年9月に幕張メッセで開催される東京ゲームショーにおけるスウェーデンパビリオンにおける展示の段取りならびに円滑に行うための各種の補助ことを紹介した。このイベントは、毎年ゲームデザイン学科の優秀なゲームの展示を行うと同時に学科の教員、そして学生に日本のゲームの現状を理解してもらうことを目的としている。この東京ゲームショーでの出展は、スウェーデンと日本とのゲーム分野における橋渡しの役割も担っている。

なお、本ネットワークの今年の参加者は100名を越えたそうである。講演が終了後、恒例となっている懇親パーティがあった。寿司を始めとする豪華な飲食の提供があり、また初対面とも思われる参加者同士での懇談も活発に行われ、私自身、多くのスウェーデンに住む日本の方とも知り合いとなることができ、私を含め多くの参加者が大変満足されたイベントであったと実感された。余談であるが、パーティ会場である女子学生が中嶋の下に来て、来年の文部科学省の修士に応募したいので、最も相応しいゲーム関連の教授を紹介して下さいと依頼され、早速、友人を紹介したところ晴れて留学が決定したとの知らせを友人から受けた。また本人からも喜びのメールが届いた。これはまさに本講演会の成果である。今後も多くの学生がスウェーデンから日本の大学へ留学され、日本とスウェーデンとの交流が益々盛んとなることを望むものである。



## 『7世紀におけるアッシリアのバビロニア政策』

ヘルシンキ大学博士課程アッシリア学専攻 伊藤早苗

2014年11月27日、JSPSストックホルム研究連絡センター、北海道大学ヘルシンキオフィス、在フィンランド日本国大使館の共催でフィンランド合同同窓会会合がアアルト大学で行われた。この会合で筆者は自身の研究分野であるアッシリア学および博士論文の概要について講演をする機会を得ることができた。

### アッシリア学

アッシリア学の定義は様々であるが、基本的に紀元前3000年頃からアレクサンダー大王によるペルシア帝国滅亡の331年迄の古代中近東における楔形文字研究である。現代の文明、文化、宗教も部分的に古代中近東の影響を受けており、例えば旧約聖書のノアの箱舟物語はギルガメシュ叙事詩に原型を見ることができ、ハンムラビ法典に見られるような法の概念も生まれ、時間や角度、地理座標などに使われる60進法も古代中近東で紀元前3千年紀に発明された。またビールやワインも少なくとも4千年紀には製造されていた。

### アッシリア学の誕生

遺跡発掘や楔形文字の解読以前に、アッシリア、バビロニア、ペルシアの存在は古代ギリシャ・ローマの古典や旧約聖書から知られていた。これらの遺跡は現地では勿論古くから認識されていたが、後にヨーロッパの人々に再発見された。19世紀にフランス人のボッタ（1802-1870）がアッシリアの首都ニムルドとニネヴェを発掘し、ニネヴェの有翼人面牡牛像をパリに運んだ。イギリス人のレイヤード卿もニムルドとニネヴェを発掘し、ニネヴェで何千枚という粘土板文書から成る前7世紀のアッシリアの王室書庫を掘り当て、現在これらは大英博物館に収められている。ドイツ人コルドウェイは1899年から1917年にかけて初の科学的な考古学発掘をバビロンで行い、かの有名なイシュタル門をドイツに送っている。1857年には楔形文字が解読され、アッシリア学が公式に誕生したと見なされている。

### フィンランドにおけるアッシリア学

フィンランドのアッシリア学教育は長い歴史を持っている。アッシリア学は始めは東洋文献学の一部として1891年からタルクヴィスト（1865-1949）とホルマ（1886-1954）によってヘルシンキ大学で教えられており、1949年からはサロネン（1915-198）の着任とともに独立した学問領域となった。1978年パルボラが教授に任命され、プロジェクトを通してヘルシンキ大学をアッシリア学における最も重要な研究機関のひとつとした。フィンランドにおける120年に及ぶアッシリア学教育と研究は世界で5番目に長い歴史を持つことになったが、ヘルシンキ大学はパルボラの2009年の定年退職とともにアッシリア学の教授を新たに任命しないことにした。これはアッシリア学がフィンランドから消えるという重大な危険を示唆している。

### アッシリアとバビロニア

アッシリアは北メソポタミアに位置し、前8世紀に帝国となり、前7世紀には最盛期を迎えて現代のイランからエジプトに至るまで中近東のほぼ全域を支配した。一方バビロニアは南メソポタミアに位置し、首都バビロンはメソポタミアの文化と学問の中心であり続けた。バビロニアはアッシリアの支配下に入ったが、度々反乱を起こしていた。



フィンランド合同同窓会会合での講演の様子

## センナケリブ (705-681 BC)

センナケリブは旧約聖書からよく知られている人物であるが、父の戦死により、前705年バビロニアの王位とアッシリアの王位を継いだ。1年後の反乱により一旦バビロニアの王位を失うが、取り戻した後に属王を即位させた。後にこの王を退け自身の息子を王位に据えたが、エラム王がバビロニアに侵攻し息子を連れ去ってしまった。この事件の後、センナケリブはバビロンを包囲し、陥落後は徹底的に破壊した。バビロンの破壊はアッシリアーバビロニア関係の転換点となっている。

## エサルハドン (680-669 BC)

前681年センナケリブは2人の息子に殺害され、この暗殺の関与を否定する別の息子エサルハドンが王となった。彼は直ちにバビロニアへの宥和政策を実施し、バビロンを再建して再び人を住まわせ、バビロニアの神殿や神像を修理した。一方アッシリアでは、おそらくアッシリア人にアピールするため世俗的また軍事的建造物を建てた。バビロニアの宥和政策は成功し、彼の治世中バビロニアでは反乱が起こらなかった。前672年エサルハドンはバビロニア王国の再建を計画し、彼の長子シャマシュ・シュム・ウキーンをバビロニア皇太子に、別の息子アッシュルバニパルをアッシリア皇太子に任命したが、後者により高い権威と権力を与えた。

## アッシュルバニパル (668-c. 630 BC)

前681年エサルハドンはエジプト遠征へ向かう際に死亡し、翌年アッシュルバニパルはアッシリア王座に就き、その1年後シャマシュ・シュム・ウキーンをバビロニア王に即位させた。アッシュルバニパルはバビロニアの知識と学問に強い関心を抱き、バビロニア由来の学術文書や文学文書を収集し、当時の首都であるニネヴェの文書庫に保管した。この文書庫は現在「アッシュルバニパルの図書館」として知られている。

シャマシュ・シュム・ウキーンの権威は限定されていたが、20年間バビロニアを支配した。初めはアッシュルバニパルに忠実な属王であったが、前652年アッシュルバニパルに対し反乱を起こし、バビロニアの諸都市や部族民、近隣諸国から広く支持を得た。アッシュルバニパルは時折武力行使はするものの、センナケリブとは対照的にバビロンを決して破壊しなかった。反乱初期から、アッシュルバニパルは直々の書簡をローカルな知事や市議会、長老、市民などの社会集団や組織に直接送ることで反乱を阻止しようとした。王自らが民衆と交信するのはこの時代大変稀である。これらの書簡はアッシリアの王のイメージの変化に新たな光を投げかけており、アッシュルバニパルは民衆や臣下、敵に至るまで恩恵を与えるまことの完璧で慈悲深い王として自身を描き、全ての人を平等に扱うという宣言さえしている。これらはアッシリア王室のイデオロギーの中では革新的なイメージである。

反乱は前648年に鎮圧され、シャマシュ・シュム・ウキーンはバビロンでおそらく自殺した。主要な反乱者は罰せられバビロンは略奪されたが、バビロンは破壊されることも民衆が市外追放されることもなかった。バビロンとその市民は丁重に扱われ、新たな属王がバビロンで即位した。

結論として、バビロニアとバビロンはアッシリアが帝国を南方拡大する障壁となり、これらを効果的に支配する方法を見つけるのがアッシリアにとっての課題であったが、これが解決されることはなかった。バビロンは全アッシリア王が求めて止まない存在であり、バビロニアとバビロンは前7世紀において特別な位置を占めていた。

## コラム～スウェーデンのお菓子「セムラ」～

クリスマス後からイースターにかけて、カフェやパン屋にはセムラ (Semlan) というお菓子が並ぶ。中をくりぬかれたカルダモン入りの丸いパンの中に、アーモンドペーストが詰まっており、その上にホイップクリームがたっぷりと載せられている。伝統的にはキリスト教の断食期間である四旬節が始まる前日に食べられていたが、断食の習慣が無くなった今でもスウェーデンの人々に愛されている。

毎年、四旬節が始まる前日の火曜日は、セムラの日 (Fettisdagen) とされており、その前後には町中のカフェやパン屋、コンビニやスーパー等いたるところでたくさんのセムラが販売される他、投票でその年の一番のセムラを決めるコンテストも開催される。

今年のセムラの日は2月17日で、その前後には町中のいたるところで、セムラを購入し楽しむ人々の姿が見られた。

Sweden's official website for tourism and travel information  
<http://www.visitsweden.com/sweden/Things-to-do/Swedish-Lifestyle/Swedish-traditions/Food---Semla/>





## その他打合せ・来会等

### スウェーデン王立工学アカデミー(IVA)との打合せ(10月27日)

阿久津センター長、川窪副センター長、工藤国際協力員が、Johan Weigelt IVA Secretary to the Academy兼Executive Vice President、Maria Dollhopf IVA International Coordinator、Edvard Fleetwood瑞日基金事務局長を訪問し、今年度2回目のIVAセミナーの講演者候補者について協議した。

また、来年度開催予定のIVAセミナーのテーマや開催時期について意見交換を行った。

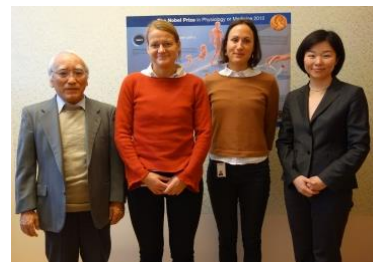


### 牧淳人スウェーデン王立工科大学(KTH)准教授の来会(10月28日)

牧淳人スウェーデン王立工科大学(KTH)准教授が来会し、研究内容と今後の取組について説明があった。当センターからは、JSPSの事業について説明した。

### カロリンスカ研究所Faculty Office and International Relations担当者の来会(11月18日)

11月に新しくカロリンスカ研究所Faculty Office and International Relationsに入職したMarlene Deogan International Coordinatorが、Maria Olsson International Coordinatorとともに来会し、着任の挨拶があった。当センターから活動内容を説明し、JSPS Summer Programの協力依頼を行った。



### ストックホルム商科大学欧州日本研究所(EIJS)及び大使館との打合せ(12月2日)

在スウェーデン日本国大使館において、来年度以降に開催予定のストックホルム商科大学欧州日本研究所(EIJS)共催セミナーに関する打合せを行った。打合せには、Marie Söderberg EIJS所長・教授、石塚英樹在スウェーデン日本国大使館公使、佐藤政文同大使館一等書記官、阿久津センター長、川窪副センター長が出席し、本セミナーの協力体制について意見交換を行った。

### Göran Marklund VINNOVA 副長官との会談(12月9日)

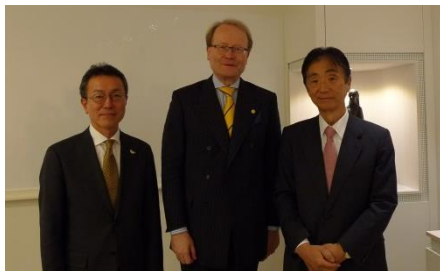
森元誠二在日本スウェーデン大使館特命全権大使の主催により、ストックホルム市内において、Göran Marklund VINNOVA 副長官との会談が行われた。本会談には、科学技術振興機構(JST)から中村道治理事長及び石田秋生上席主任調査員が出席し、当センターより、阿久津センター長と川窪副センター長が出席した。会談では日瑞の学术交流等について活発な意見交換が行われた。

### Olov Amelinノーベル博物館館長との会談(12月10日)

安西祐一郎日本学術振興会理事長が山脇良雄文部科学省国際統括官他とともにノーベル博物館を訪問し、Olov Amelin ノーベル博物館館長と2015年3月に開催予定の「ノーベル・プライズ・ダイアログ東京・2015」やノーベルセンター設立計画に関する会談を行った後、同博物館内を見学した。当センターより川窪副センター長が随行した。

## Anders Hamstenカロリンスカ研究所学長との会談(12月11日)

安西祐一郎日本学術振興会理事長が山脇良雄文部科学省国際統括官他とともに、Anders Hamstenカロリンスカ研究所学長を表敬訪問し、Hamsten学長よりカロリンスカ研究所の5か年計画「Strategy 2014 - 2018」について説明を受けた。当センターより、阿久津センター長が同行した。



## 安西祐一郎日本学術振興会理事長御夫妻他の来会(12月11日)

安西祐一郎日本学術振興会理事長御夫妻が、山脇良雄文部科学省国際統括官他とともに、当センターを訪問し、今後の日瑞学術交流の促進について意見交換を行った。当センターより、近年の北欧地域における学術交流状況や当センターの活動内容を説明した。



## スウェーデン王立工学アカデミー(IVA)との打合せ(12月12日)

阿久津センター長、川窪副センター長、工藤国際協力員がスウェーデン王立工学アカデミー(IVA)を訪問し、3月9日にIVAにおいて開催される今年度2回目のIVAセミナー“Fuel-Cell Vehicles – the Solution for Fossil Free Transportation?”の打合せを行った。IVAからは、Johan Weigelt IVA Secretary to the Academy兼Executive Vice President、Maria Dollhopf IVA International Coordinatorが出席し、来年度開催予定のIVAセミナーの候補者に関する意見交換も行った。

## STINTとの打合せ(12月16日)

阿久津センター長、川窪副センター長、工藤国際協力員が、Hans Pohl STINT Program Directorを訪問し、2015年度のJSPSサマープログラムに関する打合せを行った。STINTは2014年度より、サマープログラムの推薦機関となっており、同年度には10名の参加者がスウェーデンから日本に派遣されている。2回目となる今年度より、STINTと協力の下プレオリエンテーションを開催することとし、会場や日時、参加者等具体的な内容を決定した。



## ルンド大学訪問(2015年1月13日)

阿久津センター長、川窪副センター長、大江国際協力員が、ルンド大学を訪問した。午前には、Jesper N. Andersen Science Director、Tomas Lundqvist Life Science Director、Lena Qvist 同大学同Laboratory Management Assistantを訪問し、MAX IV Laboratory内の視察を行った。また、午後よりKarin Frydenlund同大学医学部International Office Headを訪問し、同大学医学部の活動内容の説明を受けた。当センターからは、センターの活動内容を説明し、意見交換を行った。

## Tero Salomaa北海道大学ヘルシンキオフィス副所長来会(1月15日)

Tero Salomaa北海道大学ヘルシンキオフィス副所長が来会し、同オフィスの主催による2件のイベント(Lund Meeting(3月5日にルンドにおいて開催)及びResearch & Study possibilities in and on Japan(5月11日にヘルシンキにおいて開催))について概要説明があり、当センターとの協力体制について意見交換を行った。



## National Research Foundation of Korea (NRF、韓国研究財団) Stockholm Officeの来会(1月19日)

Dong Seong Han NRF Stockholm Office所長、Inhee Suh 同オフィス現地職員、Kwangsoo Yang長崎県立大学教授が来会し、2014年8月に着任されたHan所長より着任の挨拶とNRF Stockholm Officeの活動内容説明があった。当センターより、当センターの活動内容を説明し、スウェーデンとの研究交流について情報交換を行った。

## スウェーデン王立工学アカデミー(IVA)との打合せ(1月23日)

阿久津センター長、川窪副センター長、工藤国際協力員が佐藤政文在スウェーデン日本国大使館一等書記官とともに、Johan Weigelt IVA Secretary to the Academy兼Executive Vice President、Maria Dollhopf IVA International Coordinatorを訪問し、3月9日のIVAセミナー“Fuel-Cell Vehicles – the Solution for Fossil Free Transportation?”の最終打合せを行った。セミナー会場や参加登録、講師側への連絡事項等について具体的な内容を決定した。

## Academy of Finlandを訪問(2月4日)

阿久津センター長と川窪副センター長が、Academy of Finlandを訪問し、Heikki Mannila代表、Ulla Ellmen科学アドバイザーと会談を行った。当センターのフィンランドにおける活動内容を説明した後、Academy of Finlandが推薦機関となっているJSPS外国人特別研究員(一般)の現状等について情報共有を行い、今後の協力体制について意見交換を行った。

## ノーベル平和センター、The Research Council of Norway(RCN)、在ノルウェー日本国大使館を訪問

阿久津センター長、川窪副センター長、大江国際協力員が以下のとおり3機関を訪問した。

### ・ノーベル平和センター

カントリーレポート作成のための情報収集を目的として、ノーベル平和センターを訪問した。館内では、2014年にノーベル平和賞を受賞したKailash Satyarthi氏(インド)、Malala Yousafzai氏(パキスタン)に関する展示が公開されていた。館内を見学し、Linda Netland同センターDirector of Information and Educationに、同センターの広報活動内容を中心としたインタビューを行った。

### ・The Research Council of Norway(RCN)

Julie Christiansen RCN Senior Advisorを訪問し、当センターの活動内容の説明と、今後の協力体制に関する協議を行った。今回の表敬訪問には、Svein Grandum駐日ノルウェー王国大使館職員も同席し、情報交換を行った。

### ・在ノルウェー日本国大使館

乾展之在ノルウェー日本国大使館一等書記官を訪問し、ノルウェーにおける学術動向について情報共有を行った。また、当センターのノルウェーにおける今後の活動と大使館との協力体制について意見交換を行った。



ノーベル博物館に於いて



The Research Council of Norway(RCN)に於いて

## 竹内昌治東京大学生産技術研究所教授の来会(2月17日)

2月16日に開催された2014年度第3回KVA-JSPSセミナーの講演者として来瑞中の竹内昌治東京大学生産技術研究所教授が来会し、研究交流等に関する情報交換を行った。

## 我喜屋まり子東京大学グローバル・リーダーシッププログラムファカルティー・ディレクターの来会

我喜屋まり子東京大学グローバル・リーダーシッププログラムファカルティー・ディレクターが来会し、今回の来瑞の経緯や現在の活動内容について説明を受けた。当センターより、JSPSの事業紹介を行った。

## 日本人研究者がクラフォード賞を受賞

2015年1月15日、スウェーデン王立科学アカデミー（KVA）は、2015年クラフォード賞「生命科学」の受賞者として、Richard Lewontinハーバード大学名誉教授（米国）と、太田朋子国立遺伝学研究所名誉教授（日本）を選定したことを発表した。授賞理由は、「遺伝子多型の理解に対する先駆的な分析と重要な貢献のため（for their pioneering analyses and fundamental contributions to the understanding of genetic polymorphism）」である。日本人の受賞は、2009年に本賞を受賞した岸本忠三大阪大学教授及び平野俊夫同大学教授に次いで3人目となる。

同賞は、人工腎臓の発明者であるHolger Crafoordとその妻であるAnne-Greta Crafoordによって1980年に設立された賞で、天文学・数学・地球科学・生物学、関節炎に関する基礎研究の推進を目的としている。ノーベル賞が扱わない上記領域を補完するとされ、毎年1つの分野に対して授与される。

2015年5月6日にストックホルムのスウェーデン王立科学アカデミーにおいて、スウェーデン国王、王妃ご臨席のもと授賞式が開催され、6百万SEK（約8千6百万円）が受賞者間で均等割される。

スウェーデン王立科学アカデミー（KVA）ウェブサイト  
<http://www.kva.se/en/pressroom/2015/the-crafoord-prize-in-biosciences-2015/>



太田朋子国立遺伝学研究所名誉教授  
（国立遺伝学研究所公式HPより転載）

## スウェーデンの新しい研究センター「Swetox」始動

2014年10月7日にセーデルテリエ市の旧アストラゼネカ研究施設において、「Swetox」という新たな研究センターが完成し、Swetoxの議長であるHarriet Wallbergカロリンスカ研究所前学長・現理事長、設立者の一人であるAnders Hamstenカロリンスカ研究所学長等、約120名が開会式に出席した。同研究センターは、より安全な化学物質の研究を目的として設立された国の研究センターで、カロリンスカ研究所やスウェーデン王立工科大学をはじめとする11の高等教育機関が運営を行い、化学、健康、環境等に関連するあらゆる分野の研究者が集い研究や教育を行う。

Åke Bergman Swetox所長は、「Swetoxが、国内及び国際的に中心的な役割を任う機会を我々にもたらしものとして期待している。」と述べている。

Swetoxウェブサイト  
<http://swetox.se/>

## フィンランド政府：大学のプロファイリング（独自性強化）に対する競争的資金の提供を開始

フィンランド政府は2015年より、研究の質を向上する能力を改善するために、大学のプロファイリング（独自性強化）戦略を支援し加速化することを目的に大学の戦略的研究分野や新しいイニシアティブを強化する取組みを対象とした競争的資金制度を開始する。本競争的資金は、大学単位で応募することとなっており、申請を希望する大学はプロファイリングの行動計画と作業分担、他の大学や研究機関、社会との協力計画を作成し、Academy of Finlandに申請書を提出する。

2015年の5月には資金の支給先が確定し、計5千万ユーロ（約67億円）が分配され、各大学の研究に関連する機能の向上のために充てられる。

Academy of Finland ウェブサイト  
[http://www.aka.fi/en-GB/A/Funding-and-guidance/Funding/AZ-index/Competitive-funding-to-strengthen-profiles/?utm\\_source=apsis-anp-3&utm\\_medium=email&utm\\_content=unspecified&utm\\_campaign=unspecified](http://www.aka.fi/en-GB/A/Funding-and-guidance/Funding/AZ-index/Competitive-funding-to-strengthen-profiles/?utm_source=apsis-anp-3&utm_medium=email&utm_content=unspecified&utm_campaign=unspecified)



## デンマーク：宇宙開発事業への投資を強化

2014年12月2日にルクセンブルクにおいて開催された欧州宇宙機関（ESA：European Space Agency）の閣僚会議に、同機関に所属するデンマークを含む20か国の代表が出席し、3年間で任意プログラムに対する投資を全体で440億DKK（日本円にして約7900億円）まで引き上げることに合意が得られた。デンマークは過去にも、2020年までの国際宇宙ステーション開発事業にいち早く参入しており、2012年の時点で既に2億5700万DKK（日本円にして約46億円）を投資していたが、これにより、地球観測や国際宇宙ステーションへの参入も含めたESAの事業に対してデンマークは計3億1300万DKK（日本円にして約56億円）も投資していることとなる。

Sofie Carsten Nielsen 高等教育科学大臣は、「信頼性の高い気象予報や精度の高い安全なナビゲーション等、宇宙開発は地球上での日常生活にとって重要だという点に焦点を当てなければならないと思う。」と述べている。

デンマーク 高等教育科学ウェブサイト

<http://ufm.dk/en/newsroom/press-releases/2014/denmark-increases-investment-in-space>

## ノルウェーの研究者を中心とした研究チームが、EUによる研究資金を獲得

EU最大の研究革新プログラムであるHorizon2020は、ノルウェーにあるSINTEF ICT（Stiftelsen for industriell og teknisk forskning ved Norges tekniske høyskole, Information and Communication Technology）トロンヘイム支社に所属する研究チームを中心として行われている研究（プロジェクト名：Underwater Time Of Flight Image Acquisition system (UTOFIA)）に対して570万ユーロ（日本円にして約7億6千万円）を充てることに決定した。SINTEFは、北欧最大の研究機関であり、そのうちの情報通信技術分野の研究を行っている部署が、SINTEF ICTである。プロジェクト全体の調整を担当するSINTEF ICTの他、イギリス、ドイツ、イタリア、フランス、スペイン、デンマークの機関が協力しており、プロジェクトの期間は2015年2月～2018年5月の予定である。

本プロジェクトは、現在よりも2～3倍深い所で利用可能なカメラの開発を行っており、これにより、海洋生物や海底の状況の観察や公害の調査が可能となる。また、この技術は雨、霧、雪の降る陸上での応用も可能である。

ノルウェーリサーチカウンスルウェブサイト

[http://www.forskningsradet.no/en/Newsarticle/Norwegian\\_researchers\\_to\\_lead\\_EU\\_technology\\_development\\_for\\_marine\\_monitoring/1254006307993/p1177315753918](http://www.forskningsradet.no/en/Newsarticle/Norwegian_researchers_to_lead_EU_technology_development_for_marine_monitoring/1254006307993/p1177315753918)

## アイスランド：科学と芸術分野を融合させた国際会議の開催

2015年2月26日から28日にかけてアイスランド大学において、ケベック大学モントリオール校（カナダ）、アイスランド芸術大学、アイスランド大学、レイキャビク市のThe Nordic House、在アイスランドカナダ大使館、ケベック文学・文化大学共同利用研究センター（CRILCQ）の共催で、“The Dynamics of Darkness in the North”をテーマとした国際会議が国際光年に関連づけて開催された。この国際会議は、学生、研究者、芸術家、一般市民という異なる視点を持った参加者の交流を促進することを目的としており、レイキャビク市の光害や、オーロラ観光におけるジェンダー問題、光と闇の相互作用が人々の健康にどう影響するか等、多岐にわたるテーマに沿った講演が行われた。講演者の所属機関は、アイスランド、スウェーデン、ノルウェー、フィンランド、デンマークの北欧諸国に加え、イギリス、スイス、オーストリア、フランス、ロシア、カナダ、アメリカ等と幅広く、講演や交流会を通して、科学と芸術の異分野間の交流が活発に行われた。

アイスランド大学ウェブサイト

[http://english.hi.is/frettir/dynamics\\_darkness\\_north](http://english.hi.is/frettir/dynamics_darkness_north)

## “KI Bladet” ~2014 NO.4~

ストックホルム研究連絡センターがオフィスを置くカロリンスカ医科大学では、“KI Bladet”という学内誌を発行しています。誌上で提供されている内容の一部を紹介いたします。

KI Bladet <http://ki.se/nyheter/ki-bladet-karolinska-institutets-personaltidning>

協力:熊谷果奈子JSPSロンドン研究連絡センターアドバイザー

## ハムステン学長による2014年総括

ハムステン学長は、新年を迎えるにあたり、1年を振り返って、以下について述べた。

### 新政府に対する期待について

9月に実施された総選挙以降、官公庁は新たな政権の下で始動しており、健康、産業、地域等関連分野の関係者と協力して行う医学や生命科学分野の研究、教育、イノベーションの質及びインパクトをより向上させるための大学の取り組みに対し、新政府が実り多き将来をもたらすことを期待している。

### 国際的連携の強化について

本学は、大規模で野心的且つ効率的な研究を実施し、世界最高水準の大学と戦略的な連携関係を締結することにより、多くのものを得ている。また、海外の大学との関係強化は、国際的助成団体からの資金獲得において、有利である。

(注:カロリンスカ研究所は現在、北米、東南アジア、日本、アフリカの学術研究機関と強固な関係を築いているが、今後、新たにノルウェー、英国、オランダ、ドイツのトップレベルの大学、研究機関との関係を構築させるべく、現在交渉を進めている。)

## 2015年初頭に歯科学部門を試行的に改組

カロリンスカ研究所は歯科と歯科衛生のプログラムの質改善のため、2014年初めにUKFと呼ばれるレポートを発表し、改善案を提案した。これを受け、プログラムの改組を試行的に行うものである。

改組プロジェクトを取りまとめるHultin副学長は次のように述べている。「UKFレポートに記載されている問題を読んだときに、我々の組織についての認識を新たにした。学部学生のプログラムが活動のおよそ70%を占めている。つまりは教育に重きを置いている大学である。このことが、学生に対し、研究のための十分な機会や活動的な研究グループの中で、最先端の研究に関連した卒業論文を執筆する機会を与えることを困難にさせている。UKFレポートが示す非常に複雑な教育組織は大学自身の経験に沿ったものであった。その結果、現在、責任の所在が不明確であり、質が欠如している。それゆえ、類似の組織を廃止し、プログラムについては部門の管理運営組織が教育評議会に先立って直接責任を負うような新しい組織に再編する。これにより、管理者と責任の所在が明らかになり、意思決定までの過程がよりフラットでより短くなり、意思決定や変更がしやすくなる。」

教育のためのより強固な研究基盤の構築には、数年はかかる見込みである。

## 大学のリスク評価について

カロリンスカ研究所は、3年に1度学内のリスク分析を実施している。2015年10月1日より以下の手順で、大学の最高決定機関であるUniversity Boardが研究者の論文盗用や教員不足等に関するリスク分析を行う予定である。

(1) 部門長、部局長等、教育研究組織の長やその他主な管理職に対し、各所属組織が直面するリスクに関するインタビューを実施する。

(2) 各機関の幅広い教職員の参加のもと、ワークショップを開催し、それぞれのリスクについて議論する。

(3) (2)のワークショップの結果に基づき、University Boardが優先的に対処すべき事項を設定する。

## 新高等教育・研究大臣へのインタビュー

### 高等教育、研究強化にむけた政府の施策について

労働力不足が深刻化している医療や教育における研究職を増やすため、2015年に5,000人の定員を新たに配分し、また、高等教育の質を強化のため、1億2,500万SEK(日本円にして約18億円)を助成する予定である。さらに、学部課程の学生の研究に対する意識を高めるため、多くのドクター学位を持った教員の養成が必要である。

### 長期研究計画の策定について

政府は、2016年~2020年の詳細な研究計画を策定する予定であるが、10年計画が必要である。今後、長期研究計画を作成し、議会において他の政党からの支持を得たい。

### 女性研究者の増加と研究費の平等な配分のための政府の施策について

①透明性の確保、②実績による資格の決定、③研究現場における男女平等な評価法を採用することが、重要である。

## イベント予定

セミナー・シンポジウムの開催について随時ホームページでお知らせしています。ストックホルムセンターHPをご覧ください。最新情報をご希望の方は以下URLから登録してください。

<http://www.jsps-sto.com/contact.aspx>

### Research and Study possibilities in and on Japanの開催

在フィンランド日本国大使館、The Academy of Finland、The Finnish Funding Agency for Innovation (Tekes)、The Finnish University Network for Asian Studies (Asianet.fi)、ヘルシンキ大学、北海道大学、文部科学省国費留学生フィンランド同窓会、JSPSフィンランド同窓会、当センターの共催で、“Research and Study possibilities in and on Japan”が開催されます。本イベントでは、共催機関による活動内容紹介や、分科会等が行われる予定です。詳細は以下のとおりです。

日 時：2015年5月11日（月）

会 場：Snellmanninkatu 12, Svenska social- och kommunalhögskolan-building,  
University of Helsinki, Finland

講演者：Bjarke Frellesvig オクスフォード大学教授兼ヨーロッパ日本研究協会会長  
市岡利康 日欧産業協力センタープロジェクトマネジャー

参加登録方法：

参加を希望される方は、1. 氏名、2. 所属機関・部署、3. Eメールアドレスを [sanae.ito@helsinki.fi](mailto:sanae.ito@helsinki.fi) (伊藤早苗氏) までお送りください。

### JSPSフィンランド同窓会セミナー"The Future Diagnostics"の開催

以下のとおり、フィンランド同窓会セミナーを開催します。

日 時：2015年5月21日（木）

会 場：Turku Science Park area

講演者：植田充美 京都大学大学院農学研究科教授  
Erkki Soini トウルク大学教授 他

※当セミナーに関する詳細は、JSPSストックホルム研究連絡センターHPをご覧ください。

## 事業のご案内

### 二国間交流事業(共同研究・セミナー)

本事業は、個々の研究者交流を発展させた二国間の研究チームの持続的ネットワーク形成を目指し、我が国の大学等の優れた研究者（若手研究者を含む）が相手国の研究者と協力して行う共同研究・セミナーの実施に要する経費を支援します。

[http://www.jsps.go.jp/j-bilat/semina/shinsei\\_bosyu.html](http://www.jsps.go.jp/j-bilat/semina/shinsei_bosyu.html)（日本語版）

<http://www.jsps.go.jp/english/e-bilat/call.html>（英語版）

### 外国人特別研究員事業(一般及び欧米短期)

#### (JSPS Postdoctoral Fellowship (Standard & Short-term))

本事業は、諸外国の若手研究者に対し、我が国の大学等において日本側受入研究者の指導のもとに共同して研究に従事する機会を提供する事業です。

平成27年度採用分募集要項をJSPSのHPにて公開中です。

<http://www.jsps.go.jp/j-fellow/>

また、スウェーデンからの平成27年度（2015年度）分申請受付は2月26日をもって1次募集を締め切りましたが、一般、欧米短期ともに2次募集を受け付けております。御関心のある方は以下のホームページをご確認ください。

<http://www.jsps-sto.com/jspsfellowships.aspx>



## その他

### カロリンスカ研究所同窓会 会員募集

KIでは過去・現在問わず、在籍されていた方々のためにKI Alumni & Friendsを設立し、様々なイベントの企画、メールマガジンによる情報提供を行っています。KIに在籍した事があり同窓会に関心がある方は是非以下のホームページを御覧ください。

<https://www.network.alumni.ki.se/portal/public/Default.aspx?AcceptsCookies=yes>

### JSPS Stockholm News Letterの定期購読について

ニュースレターの定期購読を希望される場合、1. 氏名、2. 所属機関・部署、3. メールアドレスを [jspsto@jspsto.com](mailto:jspsto@jspsto.com) までお送りください。電子メールにて配信します。



表紙写真：喫茶店のショーケースに並べられたセムラ

2月初旬から中旬にかけては特に、多くのセムラが店頭に並べられ、多くの喫茶店やベーカリーが、セムラを買い求める人々で賑わっていた。  
(撮影 工藤奈津美)

**JSPS**  
STOCKHOLM

JSPS Stockholm News Letter 第45号

編集長: 川窪 百合子

編集: 工藤 奈津美

発行日: 2015年3月20日

発行元: 日本学術振興会ストックホルム研究連絡センター

連絡先: JSPS Stockholm Office, Retzius väg 3, 171 65 Solna, Sweden

Phone: +46 (0) 8 5248 4561 FAX: +46 (0) 8 31 38 86

Website: <http://www.jspsto.com/> E-mail: [jspsto@jspsto.com](mailto:jspsto@jspsto.com)